

自然広場から： 近隣の自然の変化に目を向ける No.41

「団子が先か 桜見が先か？ Dumpling or cherry blossom？」

2021年3月24日

今年の桜の開花も春速でやって来た（東京は3/14、記録的に早かったとか）。地元、芦花公園の名物・高遠小彼岸桜は例年、染井吉野桜よりも早く開花するが、今年は3月はじめがピークで、日中は多くの家族づれが園内でくつろぎ、遊んでいた。

実は、2月半ばから赤味の花の河津桜が咲き、あっと言う間に濃い紅色の寒緋桜やおかめ桜が続いて現れた。そして最近では、次郎桜(*1)、大島桜、枝垂れ桜も顔を出し（4月になれば黄緑色のギョイコウ桜や八重桜も加わり）、多様な桜を楽しむことができる。つまり、芦花公園では、染井吉野は主役の座を奪われている感じがする。とは言え、今（3/24）は、粕谷八幡神社と道路沿いには染井吉野の桜並木が満開の花が広がり、周囲を謳歌している。

*1: 次郎桜は品種名ではなく、明治の文豪・徳富蘆花が学費を支援した苦学生・篠田次郎の名に由来する。きつい労働をしながら大学で学んでいたが、肺炎で急死した事を悼んで植えられた。

私は、公園と近隣を歩きながら多様な桜をカメラで追っているが、“本来の”日本の桜の風景を見ているのかも知れない、と最近買った本「チェリー・イングラム 日本の桜を救ったイギリス人」を読みながら思った。桜と言えば染井吉野と多くの日本人は思っている現実を客観視させられたからである。改めて説明するまでもなく、染井吉野は、例年は4月はじめから温暖な地方から北海道まで次々と咲き（桜前線）、1週間ほどで花は散る。多くの日本人は、一斉に咲く短い命を存分に愛で、身と心を浮き立たせ、宴の後に命の儂さを共有している。今や日本を代表する桜である。この品種は江戸後期に大島桜と江戸桜の交配によって生まれたクローン（全く等しい遺伝子組成を受け継ぐ生物）で、江戸後期に大島桜と江戸桜の交配によって生まれ、明治以降、全国各地に広がり今に至っている。

しかし、イングラム(1881-1982)は、日本の自然（野鳥、桜）と日本人のセンスに魅了されながらも、桜の品種が減っていくことを憂い、日本の山桜、里桜をイギリスに移植して育て、交配品種もつくった。その成果を、長期間にわたり次々に咲く100種の桜の庭園に遺している。彼が大事にしたのは一種類ではなく、多様な桜であった。庭園はその証しであった。